

竹富島(沖縄)にみる観光地化への軌跡

玉 村 和 彦

- I 過疎化現象
- II 農業の崩壊
- III 生活の基盤
- IV 観光地化への動き
- V 土地買占めによる混乱
- VI 展 望

I 過疎化現象

竹富島は、沖縄県八重山郡にある日本最南端の竹富町を構成する7島のうちの1島である。うっそうたる原生林が覆っている西表島を除くあと島(竹富島、黒島、鳩間島、波照間島、新城島、小浜島)は、それぞれ周囲4~15kmのお盆をふせたような小さな島である。亜熱帯に属するこれら隆起さんご礁からなる島々は、日の光にあてられて刻々と色をかえる美しい海にかこまれている。

沖縄県下で本島に次いで大きい島であるが、ジャングルによって東部と西部とが今なお分断されており、かつ継続的な開発政策がとられてこなかった西表島。上地島と下地島とからなっているが、下地島はすでに無人島化しており、両島とも牧場として利用されている新城。本年(1974)中にさらに10名の転出が決まっている小さな島鳩間島。さとうきびを生産しな

くなった黒島。今なお主としてさとうきびの生産に頼る小浜島と波照間島。そして石垣市より最短距離にある竹富島。約1,000世帯、人口4,000人が住むこれらの島々(表1)がすべて石垣市を中心とした航路で結ばれているため、町役場は石垣市におかれている。いずれの島にも共通して言えることは、貧しいことである。ちなみに1972年度の町予算での歳入総額(674,381,000円)に占める町税の割合はわずかに1.4%(9,460,000円)である。これを町民1人あたりの年額町税負担額になおすと228円となる。

表1 竹富町を構成する島

	周囲(km)	面積(km ²)	世帯数	人 口	石垣よりの最短距離(km)
竹 富	8.33	6.32	135	334	6
黒 島	12.13	13.73	104	337	15
新 城	8.68	3.85	12	20	24
小 浜	13.49	10.49	157	479	14
鳩 間	4.26	1.08	30	59	30
波 照 間	14.80	14.90	225	967	42
西 表	75.48	290.25	435	1,744	22.5
合 計			1,098	3,940	

資料 『町勢要覧』昭和47年、沖縄県八重山郡竹富町より作成。

注 これら以外に無人島として、由布島、内離島、外離島、中之御神島、嘉弥真島がある。

これらの島にはそれぞれその時の国の政策が、中央よりさらに大きな振幅をもって反映してきた。竹富島をここでのケース・スタディとしてとりあげるのは、なにも竹富島にこの振幅の度合が他の島よりも強くあらわれているからではない。竹富島も他の島と同様に台風の通り道にあり、人々は天災をそれが人間に毎年課せられてきた運命かのように耐えてきた。西暦によって1524年竹富島に八重山の蔵元(中央行政機関)がおかれたこと

もあったがそれもほんの20年間のことであり、以来、中央集権制度に組み入れられれば入れられるほど、離島であるが故に課税は重くなり、それへの見返りはまた離島であるが故に無視されてきた。そのような自然的社会的なきびしさの中に耐えてきた人々の素朴な生活は、きつい農耕作業の中で、細やかな人情、厚い礼儀、心をこめた神事・民謡・踊りに支えられた共同体として維持されてきたのも、他の島とまた同様であった。ただ竹富島の場合は、石垣市から船で30分（現在ではホーヴァークラフトでわずかの5分）の地の利と、島のほぼ中央にさんごを積みあげた塀に囲まれた屋敷にしっくいどめた赤瓦の民家がきわめて整然とまとまっており、さらに上勢頭^{うえせとう}享氏^{ととおる}によって集められた民芸蒐集館や詩情をそえる星砂とが、自然と旅人を集め世人の注目をひいたのであった。このような地の利とロマンスズムとが後に述べる観光資本による土地買占め騒ぎにまで発展するのであるが、過疎化の現象に観光地化への動きが重なりきわめて複雑化したところに竹富島の特殊性があるといえよう。

竹富島は一番高い所で海拔21mのほぼ円型の島である。白い砂浜、それにつづく保安林、島の大半を占める牧場、そして島の中央に西、東、仲筋^{なかつじ}の3つの集落が寄りそうように存在している。この島には、第2次大戦後台湾からの引揚者によって人口が膨張したことはあった（表2参照）が、明治以来常に1,000人前後の人々が生活してきた。島在住の上勢頭^{うえせとう}享氏^{ととおる}の調査と町役場の住民登録の上での数字とは若干のちがいがあがあるが、ともにこの人口が昭和30年頃より減少傾向をたどりはじめている。年によって減少の多少はあるが、時には1959年のように1年間で2割の人口が減少している年もある。これらの過疎化現象は、社会的減少である域外への流出と、若夫婦がいなくなり出生が少なくなる自然的減少によっても一層拍車がかかった。石垣へ、沖縄本島へ、そして本土へと出るべき若い人はほとんど出たため、人口減少が近年になってより緩慢になり、最近では330人前後

表2 竹富島人口動態表

	上勢頭享(島在住)氏調べ		町 役 場 調 べ		
	世 帯 数	人 口	世 帯 数	人 口	調 査 月
1890	155	938			
1947	281	2,600			
1954	229	1,212			
1955	217	1,158		1,054	12
1956	214	1,123			
1957	197	913			
1958	186	833			
1959	187	803	186	859	10
1960	185	640	192	789	12
1961	164	671			
1962	159	668	161	665	12
1963	156	629		675	2
1964	147	532			
1965	141	489	148	537	6
1966	130	432	139	442	6
1967	119	382	129	425	5
1968	124	384	126	401	5
1969	122	372	126	390	12
1970	122	351			
1971	117	331			
1972	123	327	135	334	12
1973	125	330	140	325	11

注 1890 (明治23年) については山城善三・上勢頭享編『おきなわのふるさと 竹富島』、竹富公民館、昭和46年による。

の相対的安定期をむかえている。

人口の流出はまた年齢別の人口構成(表3)を見れば一目瞭然となる。人口339名中に占める老人(竹富島では55歳までが『生産人』として考えられている)は150名となっており、働き盛りの20代、30代は極端に少ない。児童は比較的多いが、高等学校が島にないため、16~20歳の人数は急減する。現在22名の島出身の高校生が石垣市に下宿して通学している。近

年の人口流出現象は、これらの高校生が島に帰らずそのまま石垣ないしは他の地域に就職することによる。

このように過疎化が進み老人の島となっている竹富島を、さらに経済的に分析してみよう。

II 農業の崩壊

1959年の農業の実態を表4および表5によってみてみよう。島の全世帯が農家であり、島全体が農業に依存していたことがわかる。だからこそ水が豊富でないためできない稲作を除くあらゆる換金作物の生産に精を出していた。とりわけ島の蚕は、よい桑の木があるために優秀なものであったといわれる。それでも農業では食えず、住民の約半数が被保護世帯となっていた（表8）。

これらの換金作物が、いつごろから姿を消したかの資料はない。ただ年毎の耕地面積（表5）をみてるならば、年々減少している。とくに1966年から1967年、1971年から1972年にはそれぞれ前年に比べ半減しており、1971年には1959年の10分の1の耕地面積しかないことがわかる。

1966年から1967年にかけての激減は、それまで島にあった精糖工場の廃止と強い関連がある。竹富島に残された唯一の換金作物であるサトウキビは、天候に強い影響を受ける作物である。そのことは10アール当りの単収

表3 年齢別人口構成

	人数
0—5歳	15
6—10	23
11—15	40
16—20	13
21—25	10
26—30	11
31—35	10
36—40	18
41—45	13
46—50	18
51—55	16
56—60	24
61—65	26
66—70	19
71—75	26
76—80	32
81—85	16
86—90	7
91—95	2
計	339

注 昭和48年10月5日竹富町役場町民課調べ。

(表6)が、年によって大きな差があることから推察できる。さらに糖価が生産者の実状を反映させることなく政治的に一方的に決まるため、生産意欲を減退させ、かてて加えて精糖工場の廃止、それにとまなう嵩ばる蔗茎の海上運搬費、人件費の高騰が一層追打ちをかけた。そして1971年の早魘、その直後の台風が、竹富島のサトウキビを含むすべての農業にかい滅的な打撃を与えた。

1972年以降、竹富島での換金作物の生産高はゼロである。たしかに1972年農家戸数71戸(専業15戸、第1次兼業4戸、第2次兼業52戸)、農業人口250人となっているが、農業で生活している者は全くないといってよい。たしかに農業としておくメリットは天災等の時にあるのだろう。形式的に農業を営んでいるといっても、彼らに自己の土地がないわけではない。自

表4 竹富島における換金作物(1959)

作物名	生産高
甘 蔗	1,620トン
甘 藷	372トン
大 豆	20,736 ㍊
小 麦	29,730 ㍊
タマネギ	10トン
馬 鈴 薯	11トン
秋 蚕	203トン
夏 蚕	231トン
春 蚕	502トン

資料 『町勢要覧』1960年、竹富町。

表5 竹富島における農業統計

	1959	1960	1962	1965	1966	1967	1968	1969	1970	1971
総世帯数	186	192	161	148	139	129	126	126	122	135
農 家 数	186	184	133	116	116	89	75	77	65	71
農 家 数 比 (%)	100	96	83	78	83	69	56	61	53	53
耕 地 面 積 (アール)	15,350	15,350	10,583	?	8,319	3,862	3,962	3,993	2,923	1,589
農家一戸りの当 平均耕地面積 (アール)	83	83	80	?	72	43	53	52	45	22

資料 『町勢要覧』より作成。

1 『農林水産統計』, 昭和47年度, 竹富町役場経済課。

表6 竹富島における産糖実績

	1957	1958	1959	1961	1962	1963	1964
作付面積(アール)	3,920	3,380	3,395	840	2,240	1,700	4,150
10アール当り 単収(トン)	3.381	2.180	1.770	3.929	4.247	2.287	6.257
蔗茎量(トン)	1,325	839	601	330	451	389	2,597

	1965	1966	1967	1968	1969
作付面積(アール)	2,516	1,130	599	846	689
10アール当り 単収(トン)	4.627	2.970	5.471	6.578	3.792
蔗茎量(トン)	1,164	336	328	559	261
トン当り単価(ドル)	15.68	15.68	15.68	16.65	17.54
生産額(ドル)	19,241	5,268	5,142	9,307	4,578

資料 『町勢要覧』及び町役場経済課の資料により作成。産糖年度は4月より翌年の3月。

注 トン当り単価は上限であって、実際は糖度にスライドする。生産額は上限を用いての推定額である。

作農率80%、自作兼小作農率11%、小作農率9%である²ので、土地があるにもかかわらず農業を営んでいないことになる。たしかに1971年の干害は、飲料水すら他の島より補給しなければならなかったほどであるし、またその直後（9月29日）の台風28号は、竹富島だけで全壊19棟、半壊65棟を数えるほどのものであった³がために、それ以降の生産意欲を失わせたことはたしかであろう。それにもかかわらず、たとえば西部落47世帯のうち、自家用の野菜すら作っていない世帯が37世帯もある現実をどのように理解したらよいのだろうか。農業をしなくとも、牧畜業やあるいはあらたな観光産業で生活ができるのだろうか。あるいは観光資本に売った土地の代価の金利で生活ができるのだろうか。ともかく竹富島の農業に関する限り、完全に崩壊したといえよう。

2 前掲資料。

3 『干ばつと台風 1971年災害の記録』、沖縄県八重山支庁農林水産課に詳しい。

III 生活の基盤

四季を通じて牧草に恵まれている竹富島は、戦前より牧牛がさかんであった。それが戦争により全滅して以来、復興するには長い年月がかかった。

島での牛は、肉用種の黒和牛がほとんどである。人工授精は離島であるためにむつかしく、種牛(1973年で3頭)とともに放牧する方法がとられている。自然的にはきわめて恵まれており、飼育にほとんど手数がかからない。そのうえ1年で成育する牛の代価は、約30万円であるので、島の住民にとっての大きな収入源となる。

1964年に牛の頭数(表7)が急激に増加するのは、島外資本による「竹富牧場株式会社」(資本金10,000ドル, 上原秀夫社長, 102ヘクタール)の設立(1963年12月10日)によるものである。また1972年に激減するのは、1971年の天災時に島の人の多くが牛を手離したことから、この「竹富牧場(株)」が資金繰りに困って、「竹富観光株式会社」(後述)に牧場を売却したためである。

表7 竹富島における家畜家きん数

	1959	1960	1962	1964	1966	1967	1968	1969	1970	1972	1973
牛	89	44	131	397	395	434	474	526	507	166(14)	156
馬	1									8(1)	項目なし
豚	90	107	62	92	143	107	116	135	119	25(4)	20
山羊	453	450	457	540	246	221	86	106	122	158(18)	210
水牛									12	7(7)	項目なし
鶏	1,093	758	726	737	291	494	574	335	216	103(2)	70

資料 『町勢要覧』より作成。1972年の()内は飼養戸数。
1973年は上勢頭亭氏調べ。

「竹富共同牧場組合」（100ヘクタール）は、1969年には組合員42人であったが、現在（1963年12月）では35人に減少している。1971年の天災の時に、牛を飼育していた家は、牛を売却することによって辛うじて危機を乗りこえることができたといわれるので、その時売却したままである家があるのだろう。ただ組合員が35名であっても、そのうち11名が牛を飼っていない組合員であることを考えると、最初の子牛（雌）を購入する資金（約30万円）がないことを推察させる。現在、牧場（組合）での頭数は146頭であり、それ以外に10頭が島の人によって飼われている。

豚は、1971年以来急減している。船で輸送すると2～3kg減量するといわれる離島の不利がここにもある。

粗食に耐える山羊は、きわめて手数がかからず、また1頭2～3万円で売ることができるといわれるが、これも往時の約半数しか飼育されていない。

家畜はどれだけの収入を島にもたらしているのだろうか。1年の生産頭数を仮に牛50頭としても1,500万円、豚、山羊あわせても150万円位にしかすぎない。それでもサトウキビよりは割がよい（表6）。この家畜の代価を牛は24戸（1973）、豚4戸（1973）、山羊14戸（1972）の生産者でわけるのであって、恩恵を受ける世帯は限られる。ましてこれらの家畜の2種類3種類を同一世帯で飼っている場合が多く、家畜によって現金収入のある世帯はごくわずかである。

水産業は、漁場に恵まれているにもかかわらずきわめて不振である。戦争および災害による諸施設の破壊、沿岸漁場の荒廃、販売組織や技術および漁法の欠陥、漁港施設の不備、水産加工場がないことや消費地から遠く離れていることもたしかに理由にはなるであろうが、もっとも大きな理由は資金がないことと漁業のできる若者のいないことであろう。竹富島には漁業権すら設定されていない。統計では6戸が水産業を兼業していること

になっているが、⁴ 現実には2戸だけである。

産業に従事していない世帯は、子供達の仕送りが十分でないかぎり生活する手段がない。送金がどれだけあるかの資料はまったくないが、ただそれほど技術なくして離島していった人々の生活が余裕あるものとは考えられない。そこで政府よりの扶助を受ける家族が多くなる。

表8 竹富島における生活扶助世帯及び人員

	1958	1959	1660	1961	1962	1965	1969
扶助世帯数	166	153	115	91	84	79	60
扶 助 人 員	539	384	221	241	285	355	240
島総世帯数	186	187	185	164	159	141	122
島 総 人 口	833	803	640	671	668	489	372

資料 『町勢要覧』より作成。ただし、島の世帯数、人口は上勢頭
享氏調べ。

米軍よりの現物給与の形で補助を受けていた生活困窮世帯（復帰により打切り）とその他の年金受給者とをあわせた生活扶助世帯および人員は表8でわかる。1969年度でこのうち7割ほどが生活困窮世帯（32世帯166人）であるので、実際に年金を受けていた人は28世帯74人である。このうち障害福祉年金および母子福祉年金の受給者はごく少数であるので、他のすべての人は老齢福祉年金の受給者である。なお、1970年でこれら年金の受給者の総額は4524.70ドルであった。また復帰後の受給者の数は22世帯55名である。

遺族年金の受給者もまた多い。島民330名のうち67名におよぶ。ここにも激戦地であった沖縄の影がある。人数はさだかではないが、軍人恩給の受給者もこれ以外にいる。

4 前掲『農林水産統計』。

働く能力がありながら仕事のない人は、失業対策事業として、主として道路の補修改良の作業をしている。島には実人員20名おり、そのうち保護世帯は2名である。これらの人の日給は、ランクによって差はあるけれども、1日平均1,337円であり、月に22日働くことになっている。1960年度延1,670人の失対人員数を、現行の労働日数から逆算すれば6名となるので、実人員は増加していることになる。これらの人々の中には、土地を売却したために生活に困って失業対策事業をしている者もいる。

以上みてきたように、生活の基盤は、わずかの世帯に現金をもたらしている牧畜業以外には、老人が多いこともあって被保護世帯となることや、年金、恩給、それに失業対策事業に依存していることがわかる。ただ近年は観光客が多く、ここで観光客が島にどのような利益をもたらしているかの分析が必要となる。

IV 観光地化への動き

竹富島の入込観光客数をとらえるのもっともよい資料は、蒐集館の上勢頭享氏による拝観者数の記録である。島にきたほとんどの人が、島の生活用具、民芸品がそろっているこの蒐集館を訪れ、また拝観者名簿に名前を記入するという事実からして、かなり正確なものとみてよいであろう。これによると、1962年にすでに住民の3倍ほどの人が来島している。以来、竹富島の人気とともに、年には前年の倍以上という驚異的な入込者数の増加を示して

表9 喜宝院蒐集館拝観者数

	拝観者数
1960	362
1961	628
1962	1,885
1963	2,701
1964	2,866
1965	4,742
1966	5,261
1967	7,457
1968	9,946
1969	19,314
1970	28,875
1971	29,419
1972	30,362

資料 上勢頭享氏資料による。

いる。

ただここで、ホーヴァークラフトの就航した1972年について述べる必要がある。それまで竹富島に行くには、ポンポン船の若竹丸一隻しかなかったが、この年の夏石垣よりの離島航路（西表西部と波照間を除く）の船会社が合同して「八重山観光フェリー株式会社」（社長瀬戸弘町長）を設立し、ホーヴァークラフトを就航させた。したがって、在来の若竹丸とホーヴァークラフトが観光客を運ぶことになった。

表10 ホーヴァークラフト月別乗船人員（1972—1973）

	一 般	町 民	合 計	運航日数
10	1,343	15	1,358	29
11	918	18	936	22
12	615	229	844	22
1	324	683	1,007	20
2	249	939	1,188	24
3	1,863	43	1,906	28
4	1,361	123	1,484	25
5	1,557	26	1,583	27.5
6	1,265	25	1,290	24
7	1,801	36	1,837	27
8	1,752	25	1,777	21
9	1,521	32	1,553	26
計	14,569	2,194	16,763	295.5

注 竹富発石垣行の乗船人員（石垣発竹富行の乗船人員は17,799名）。
乗船定員52名，1日2航海。
八重山観光フェリー株式会社提供資料による。

これがこの年の観光客の増加につながらなかったのは、その年の5月15日に沖縄が日本に復帰して、海上交通の監督業務が海上保安庁に移管され、船の定員が厳しく守られるようになったためである。1971年と1972年の蒐集館の拝観者数とがほとんど同じであるということは、今まで1隻がしていた運送を2隻がしていることになる。ホーヴァークラフト（定員52

名）、若竹丸（定員45名）ともに1日2航海である。夏のピークの時には、席を確保するため朝の5時より並んだり、あるいは地元の人が乗れないという現象までひきおこすこととなった。⁵ ホーヴァークラフトは離島航路であることを考えれば、その座席占有率は決して悪くない。しかし運航している小浜、黒島への利用客がそれほど多くないこと、定員が少ないこと、燃料等の維持費が高いこと等もあって、昨年は約2,000万円の赤字が出たといわれる。

拝観者の数が即宿泊者の数にならないことは、昔も今もかわらない。しかしその比率が問題である。石垣より島に日帰りで行ってくることは、復帰前にもごくかぎられた日（日・祝日）だけ可能であった。それがホーヴァークラフトの就航によって、天候さえ許すならば通年石垣よりの日帰り圏となった。そのことは、以前に比べて日帰客の割合が増加したことを推測させる。⁶ 通過観光客が多くなっている割合に比して、宿泊客はそれほど伸びていないが、受入施設のキャパシティは急速に大きくなっている。

観光客を受入れる宿泊施設としては、2年ほど前までは、旅館2軒（収容人員60名）、民宿1軒（同20名）であったが、ここ1～2年のあいだに特に西部落を中心として民宿がではじめた。現在前述の旅館2軒に、民宿が11軒（同約170名）ある。

これらの宿泊施設は、6月から9月の4カ月間観光客でどこもほぼ満員であるが、3月から5月にかけては1割程度、10月から12月にかけては島全体で1日10人程度、1月と2月はほとんど宿泊客がない。民宿ができるということは、島ではある程度の資産家に属する。その民宿が4カ月で1年の生活をしなければならないので、どこでも民宿以外になんらかの形で

5 定期船に乗れない人々は、モーターボート（定員約10名）をチャーターする。このようなモーターボートが6隻ある。

6 宿泊客は従来どおり若竹丸で来るということは、若竹丸とホーヴァークラフトの乗船者の客層がちがうことを意味している。

収入の道をもっている。それが時には畜産であったり、漁業であったりする。

民宿の宿泊料金は、1972年6月に1,200円から1,500円に値上げした。この料金でどれだけ民宿をしている家庭を潤すか定かではない。ルンドバーグは、域内での購入率が高ければ高いほど、観光産業がその観光地にとって有益であると述べているが、竹富島の場合ごくわずかな民宿が自家用の野菜と漁をしているのを除けば、この購入率はゼロである。民宿をする上での一切のものを島外、それも石垣より購入している。たとえば、卵が1個20円、刺身が1斤1,000円（いずれも1973年12月現在）しているが、離島であるが故にそのうえ運送費が加わる。民宿の多くは40代50代の働き盛りの人々であり、扶養家族もいることを考えると民宿をしているからといって生活が決して楽ではない。

竹富島の観光産業としては、なによりも民芸を上げなければならない。民芸といっても、女性による手織でのミンサーという織物である。バーナード・リーチ、外村吉之助氏らによって高く評価されたこのミンサーも、今では土産品化しているが、それにつれて多くの問題も生起している。織機そのものは島に81台あるが、現在織り子は71名である。そのうち特定の土産屋と契約している人が40名ほどいる。このうち島外の土産屋と契約しているものが30名である。合格品にはスタンプもあるが、その品質保持の力はなく、なかには化学染料を使ったものすら出まわっている。ミンサーが本当の民芸品としての評価を高めることが、織り子の生活を結局は保障することになるのだというには、竹富島以外にも競争者が多くいるので、今後に残された課題は大きい。

7 D. E. Lundberg, *The Tourist Business, Institutions/Volume Feeding Management*, 1972, pp. 134-140.

8 島にはこの織機の生産者が一人だけいる。注文生産であるが1カ月の生産台数は約8台である。材料はキアギを用いているが、良質のイヌマキの木は最近はとみに少なくなったという。

約7割以上といわれる通過観光客（日帰客），そして季節的変動の大きい学生を中心とした宿泊客，すべてを島外から購入しなければならない旅館，民宿，民芸として成果を得るには今一步のミンサー，観光が島の生活を支えるには，あまりにも虚弱な産業基盤といえよう。

V 土地買占めによる混乱

いわゆる観光資本が，竹富島の買収をはじめたのは1970年来のことである。復帰前には，本土の個人も法人も沖縄の土地の買収をすることができず，これら買収された土地が他人名義になっていたため，買収の全容を明らかにすることはむづかしい。今ここでこれまでに報道された資料をもとにして，その経過を多少ともたどってみたい。

「福岡開発株式会社」（本社福岡市，鬼塚利雄社長）と「日本習字教育連盟」（本部福岡市，原田観峰会長）が，島の東海岸100ヘクタールの土地確保を決めたのは1970年の末であった。早速翌年の1月より石垣在住の島出身者を通して買収しはじめ，現在15ヘクタール（地主16人）に及ぶ土地の売買契約をすませ，内金として地価（坪30セント，108円）の70パーセント，約10,000⁹ドルが支払われた。

土地買収の目的は，日本習字教育連盟50万人会員の憩いと研修の場とするとしているが，一般観光客の受け入れも同時にあげている。そのため施設として，海上遊園地，牧場，熱帯植物園，果樹園，別荘等があげられている。¹⁰「福岡開発」は東部落のはずれに民家を建築したが，それは1mほどの高床式のものであって，島在来の民家とはきわめて異質のものである。そのほかにはヤシ園を作ろうとして，ブルドーザーで自生のソテツを

9 『沖縄タイムス』，1971. 3. 30。なお，『朝日新聞』，1971. 6. 22によれば，28ヘクタールを買占めたとの記事が出ている。

10 前掲新聞。

取り払っているほかはそれほど目立った事業を行っていない。

「福岡開発」が土地を買占めているニュースを2月にキャッチした島出身者が、大手観光業者に島を売り渡すなを合言葉に、「竹富観光開発株式会社」(代表者山森盛次氏)を郷友会(島出身者の会)に呼びかけて設立することになる。「竹富観光開発」は「瀬戸弘町長が『地元のために私が作らせた』¹¹という。」この会社は1971年の大早魃の際、すでに述べた竹富牧場株式会社の牧場102ヘクタールを買収した。そして事業にも意欲的なところを示してマイクロバスを島に持ち込んだが、「竹富島を生かす会」(後述)がこの運行を阻止する。その理由は、バスの排気ガスが石垣に干してあった糸を変色させたからだといわれるが、狭い道路に所詮バスは無理であったであろう。動きがとれなくなった「竹富観光開発」は、土地をさらに某私鉄に転売したという。

島出身者の作った企業が、このように中途半端な形になってしまったのはなぜだろうか。『竹富観光開発株式会社設立趣意書』の中に、「誇り高き竹富を守ることは竹富人の責務」¹²としているが、この「竹富人」とは誰なのだろうか。島出身者にしてみれば、自分は竹富をこよなく愛する竹富人であると自負しているが、島在住の人にしてみれば、郷友会の人々は島を捨てた人とうつつる。さらに、この趣意書の中に附記として書かれていたことが島の人々を痛く刺激した。

「外資(竹富人以外の沖縄資本、本土資本)は、あくまでも拒否するのか、という問題は最も大きな関心事と思います。このことに就いてはそんな閉鎖的な狭量なことではなく、我々の基本方針に十分なる理解があって、良心的に順応し、協力する資本を入れることにはやぶさかではありま

11 『沖縄タイムス』, 1971. 3. 30. なおこの時点で3.3m² 30セントで購入, 6ヘクタールに達していると報道されている。

12 『竹富観光開発株式会社設立趣意書』, 1971. 2. 16.

13
せん。』

ここに島在住の人々による「合資会社竹富島観光」が考えられた基盤があったが、この合資会社は自然消滅の方向をたどった。

島は「福岡開発」による買収を契機として、本土資本と沖縄資本、島在住者と島出身者、買収に応じた者と拒否した者のように複雑な対立の渦中に投げこまれたが、その中でわずかながら曙光が見えてきた。それは外部的には「海洋博誘致計画」や「竹富を守る会」¹⁵等の発足の動きがあった中で、1972年末に発足した「竹富島を生かす会」¹⁶（代表者上勢頭昇氏）に、1973年4月3日の部落総会で島の全戸が加盟することを決めたことである。しかしなによりも大きなニュースは、1973年になって島を出た若者が戻りつつあることである。そして今までの若い人と帰島組とがこの暮に「竹富島青年会」を結成した。

だがすでに竹富島は、今まで述べた島外企業を主体として、実態は莫として捉えにくい、約180万 m^2 （仮登記も含む）が、また別の某所での調査によれば移転登記済のもので78万 m^2 が人手にわたっているといわれる。土地が人手に渡ること自体の善悪は、簡単に論ずることは避けるべきであろうが、しかしそれが坪（3.3 m^2 ）わずか100円前後の値段であったとするならば、それは略奪でなくしてなんであろう。「島津の収奪と同質のことが今もつづいているのか。」¹⁷ それも早魃と台風という弱味につけこんで行なわれたとしたならば、将来島の人々の怨念をとり去ることはむづかしい。島民が島の30%の先祖伝来の土地を売却したことによって得た金額

13 前掲趣意書。

14 『合資会社竹富島観光事業実施基本案』。

15 「竹富を守る会」（1972年4月発足、代表者井上幹太氏）。竹富を訪れた人を中心にして、機関誌の発行等精力的な活動をつづけている。

16 島出身で教師になった人々を中心とする「竹富を生かす会」（1972年10月4日結成、自然消滅）とは別。

17 岡部伊都子「島への手紙」『琉球新報』、1971.3.3。

18 土地を売った人は、離島者がほとんどであるということも聞いたが、島在住者も

は、坪100円として5,500万円、牛200頭分である。

VI 展 望

農業に依存していた竹富島は、すでにない。農業の崩壊した竹富島の生きる道は、それ以外に求めなければならない。それが戦前さかんであった養蚕であるのか、あるいは牧畜であるのか、あるいは観光であるのか、比較することはなほだむつかしい。ただいえることは、島の人口構成が一輪ざしのように高齢化しており、労働力を現存の島在住者に依存する仮定に立つかぎり、強度の労働を必要とする産業は無理であろう。その点、放牧しておける畜産業の将来は期待できるように思われるが、筆者はその知識を持ちあわせていないので、今ここで観光の側面に立って総括してみたい。

竹富島の観光は、非常に弱い基盤の上に立っているといわざるをえない。竹富島は魅力ある島である。しかし小さい島であるが故にその魅力の断片には、2～3時間の滞在で触れることができる。石垣をベースとしたホーヴァークラフトでの日帰り客が多いことはすでに述べた。これらの観光客は、空きカンやビンこそ島に落とすけれども、何らのお金を落とさない。

竹富島は、このホーヴァークラフトと若竹丸というポンポン船にすべてを頼っている。海上運搬という島にとっての生命線は、島の飲料水とともに、きわめて細く切れやすい。

魅力を満喫しようとするならば、やはり島に泊まらざるをえない。しかしながら島にある宿泊施設は民宿を中心とした簡易宿泊施設であって、プライベートの保たれる部屋は皆無といってよい。しかもいったん島に泊ま

ると、翌日定期船があるかどうかは翌日の天候が決めることだ。このことは顧客の中心が、旅行の期間に比較的自由的な学生層にならざるを得ないことを示している。竹富への旅行は旅であって、大量消費を目的とする旅行の商品化——観光——には、現在のところなっていない。そこが竹富の魅力なのだろうが……。

次に問題となるのは、学生層を中心とした観光客が落としたお金の行方である。これも前述したことであるが、観光によって収入のある世帯はごくかぎられ、なおかつこれらの旅館・民宿でも、野菜、魚をはじめとする食事の材料を全く島外に依存していることを考えると、果たしてどれだけの利益があるのだろうか。また民宿に人手をとられることが更に既存の農業を放棄ないしは粗放化させているとするならば、問題は一層大きくなる。

竹富島の魅力は少しずつではあるが失われつつあるのも、観光の側面から島の将来を考えるうえで大きな問題である。たしかに台風の時には強固かもしれないが島の建築様式をまったく無視して作られた鉄筋コンクリートの民宿、あるいは前述した高床式の民家の建築、デイゴの樹木に飾られて棧橋から村に真っすぐにのびる白砂の道が突然アスファルトにかわったことや、あるいは数年前まで2台しかなかった車が10台ほどに急増し、どの十字路にも書かれている味気ない本土と同じ交通標識。これらを嘆くことを旅行者の甘いセンチメンタリズムと非難する声があるが、旅行者が竹富島に期待していたものはそのようなものであったということを、島の人は理解してほしい。そして、これらはまた、観光を大きな産業の柱にしようとしている島の方針にも矛盾することになる。総合行政としての観光の位置づけがなされていないのは、日本の各地にみられることであるが、ここでもまた同じことがいえる。

以上述べてきたことは、竹富島の弱い環であった。これらの弱い環への対策が、とりもなおさず竹富島への観光対策となろう。

竹富島が将来観光に大きく依存して島を考えていくならば、まず確固とした島保存の方向が打ちだされなければならない。もっともヨットとか海水浴場のように海岸だけを生かした観光地を島の人々が願っているならば別であるが……。島保存ということは、なにも島の人々の生活そのものを昔に戻して凍結的に保存せよということにはならない。民芸家グループを中心とした「古竹富島保存会」¹⁹は、古竹富島保存地区を設定して、1940年以前の建築様式、地形、道路、民具、歌舞、工芸を守ることを目的としていたが、島の人にしてみれば、地域全体が博物館となって島の人々がその見せものになるように受けとられる危険があったのは当然である。第三者にとって過去の竹富島のイメージを追うことが、住民にとって過去の竹富島の苦しい日々の生活のイメージを追うことにつながるならば、所詮「保存」とは、第三者にとっての慰めでしかない。

合理的な解決策は、外観をできるだけ維持して、屋内は徹底的に近代化をはかることである。その時、復帰と同時に「西表国立公園」の地域として指定されたこの竹富島を、「特別保存地区」に再指定することが緊要である。「特別保存地区」になれば、規制措置にとまなう不利益が、予算等の面で不完全なものではあるがある程度補償される。この地区に島全体が指定されることがむつかしければ、部落単位に指定を受ける方策もある。ただこの時、現在ある今までの竹富島を構成してきたものと極端に異なるもの(鉄筋コンクリート、ブロック塀、アスファルト等)を撤去し、竹富島古来のものにかえていく保存修景計画が同時になされる必要がある。

単に過去のイメージを追わず、竹富島古来の姿の中に生活水準の向上を求めるならば、竹富島はより多くの旅行者を惹きつけることになろう。²⁰ただ現状のように、単に学生層だけを顧客対象とするならば、学生の休暇に

19 「古竹富島保存会設立要項」, 1971.5. なおこの発起人は、松方三郎、浜田庄司、芹沢銈介、外村吉之助、バーナード・リーチ各氏である。

20 米山俊直『過疎社会』日本放送協会, 1969年, 208-209ページ。米山氏が過疎

よって客室の稼働率が左右されることになり賢明ではない。学生対象のもの他に、新婚客、ゆとりのある老夫婦客等を対象とした宿泊施設を加えていくなれば、顧客を季節的に分散させることができる。

旅行者よりもたらされる利益が、単に宿泊業者や土産屋だけではなく、島の全体の人々の利益になるように考えられなければ、つい最近までサトウキビ刈り等に見られた共同体が一層崩壊してしまうことになる。この島から生まれた沖縄の代表的な歌「安里屋^{あさとや}ユンタ」のユンタとは結歌^{ユヅツ}のことであるが、この結^{ユヅ}が現在ほど薄くなった時はない。観光客の来島が、島にさらに貧富の差を拡げるならば——現在すでにその徴候が見られるが——、竹富島の保存はむつかしくなり、ひいては島の崩壊につながり、観光客は寄りつかなくなろう。そのために入島税というようなアイデアは、真剣に検討されてよい。

竹富島は離島でなくなれば離島でなくなるほど、石垣市に経済的に従属してきた。すでに述べたように、野菜、水産物すらまったく石垣に依存してきた。民宿をしなくとも、別の家は民宿や旅館に野菜や魚を供給したりして、島全体としての自給体制を確立することは必要である。

住民の足であるべき船についても、考慮されなければならない点は多くまた大きい。現在では、これらの船が自らの意志で動く足となっていない。島の人が石垣に買物もできないホーヴァークラフトの運行時間、お盆には島の人も帰れない混雑ぶり、そして一寸波があると欠航する航路を、島の人の利用を考え、さらに確実性あるものにするには、島を安定させることにつながる。それは医師介輔しかいない現状を考えると、医療の面でも強く要請される。ただ現在、船の定員制が守られているが故にある程度竹富島の俗化が守られていることを考えると、一步すすめて島の全体の

地の政策としてあげている「ムラの過去のイメージを追うな」ということと、ここで述べたこととは背反しない。

定員制を確立することは、時代を先取りすることにつながろう。

それにつけても、630万 m^2 の島の約30%である180万 m^2 （仮登記を含む）の土地を買収した企業は、どのような開発のイメージを持っているのだろうか。

「見捨てられてきたところがいま、もっとも豊かな美しい自然とやさしい魂を残している皮肉さ²¹。」

見捨てられてきたがために魅力を持ち、素朴な魅力を持つがために多くの旅行者を惹きつけたが、それはまたそこに多くの資本を群がせることになった。保存と開発の論議はすべて事後的である。そして多くの場合、保存がナショナルな立場に立ち、開発がローカルな立場に立ってきた。このパターンを逆転させるには、今までの中央の行政がどれだけ地方に、それも特殊な状況下におかれてきた沖縄のそれも先島に、反映してきたかの総括がなされてからでなかったならば、「保存」することがまたもや取り残されることを意味するのではないかという地元の人々の危惧を解くことにはならない。

地域の将来を決定する者は、地域住民である。もちろんこのとき地域外住民、たとえば観光客も、その地域について意見を述べることができる。情報の交換は、その地域を考えるうえでの選択の範囲を拡大するので、むげに断る必要はない。問題は地域住民が決定する際の手続きである。すべての住民の声をどのように反映させ、どのようにして決めるかによって、将来像は自らの足を持って歩きだすものとも、あるいはブルドーザーでのように強引に押しまくらなければならないものともなる。さいわい竹富島には、部落の意見を反映できるものとしての「部落総会」、「竹富島を生かす会」がある。「竹富島青年会」の活動とともに、これらの組織に期待するところ大である。

(1974. 1. 12)

21 岡部伊都子「“観光開発”という名の新しい形の収奪」『沖縄タイムス』, 1971.4.6.